

令和6年1月8日

結局「A.R.E.」とは何だったのか

昨年10月28日、連勝街道まっしぐらの阪神タイガース。私は同僚の阪神ファンに「なぜこんなに強いのか」とメールを打った。途端に連敗し苦境に。同僚からは「そんなことを言うから負けるねん」と叱責の返答メール。私もそういった言葉が禁句であることは分かっていたが満を持しての発声だったのだが、甘かった。結局優勝したからよかったものの優勝を逃していたら正に懺悔である。阪神ファンは、ペナントレース中盤以降に「今年は」と期待させるものの裏切られ続けてきた。ここが天王山というときの三連敗。なぜここの一番に弱いのか(弱かったのか)。

スポーツで、ここの一番に勝てない選手、練習では高い能力を発揮するが本番でその実力が大きく低下する選手がいる。頂上に昇りつめた選手のその地位を守る立場(追われる立場)と、相手の胸を借り挑戦する立場(追う立場)との違いはよく指摘される。卓球の石川佳澄選手は全日本選手権三連覇し、国際的にも大活躍した選手だが(世界ランキング最高位は第4位)、2018年の同選手権では美誠パンチで有名な伊藤美誠選手に敗れる。その際のコメントが「(美誠は)何でも入る。」卓球の世界ランキング一桁に昇りつめたその伊藤選手も、昨今不調が伝えられる。とくに、個人スポーツ(に近いスポーツ)では精神面の強さが勝負に大きく影響する。「びびる」という言葉がある。精神的重圧に負けて(委縮し)実力が発揮できない状況を言う。

さて2023年の新語・流行語大賞にもなった「A.R.E.」である。その語源は「Aim, Respect, Empower」とのことだが、このフレーズ自体に大きな影響力があるとは思えない。では「A.R.E.」の何が奏功したのか。ここでは、「A.R.E.」の「優勝」に対する代替効果を指摘したい。

スポーツで勝負強いここの一番の精神力はどのようにして鍛えられるのか。野球で言えば、9回裏同点ツウアウト満塁、3ボール2ストライクの状況で、投手はどのようなボールを投げられるのか？バッターはどのようなスイングができるか？卓球で言えば、最終第7セット10対10のジュースという極限状態でピンポイントとプレイし実力が発揮できるのかどうか。真の実力の獲得には、こういった精神状態を模擬したもとの練習の積み重ねが欠かせない。つまり、練習の際にも、「今まさに「9回裏同点ツウアウト満塁」、「第7セット10対10のジュース」と自分自身を思い込ませ、自分自身を極限状態に追い込み、そのもとの練習するということである。気軽に流した練習では重要な場面で実力を発揮できる能力は培われない。これは真面目にそして真剣に練習することと少し違う。意図的に精神を極限状態に置き(ある種のシミュレーション)、そのもとの真剣な練習が必要ということである。

従前、特にわが国では、パワハラ的な指導を行うOB・OGや監督・コーチがいた。彼らのやり方は肯定できないが、極限状態における能力を鍛えるのに多少なりとも効果があったかもしれない。しかし、昨今の指導法は違う。選手自身に、極限状態における実力を養成するという強い自覚をもたせることが肝要である。豊富な経験をもつ監督・コーチはそれが可能である。そして、彼らの役目はそれを鍛えることができる環境を整備することである。

今年の元日に発生した能登半島地震では200人以上の犠牲者が確定しそうである。その翌

日に能登まで支援物資を運ぼうとする海上保安庁の航空機と日航機とが羽田空港で衝突し、両機が焼失するという大事故があった。日航機の乗客乗員 379 人が客室乗務員(CA)の適切な導きにより全員無事に脱出用スライドから避難できたのは不幸中の幸いであった。その CA の冷静でかつ適切な行動は国際的にも称賛されている。CAは緊急事態における対応を毎月訓練しているというが、避難の成功はそれだけが理由ではなかろう。精神状態を緊急事態の下に置き、そのもとで適切な対応ができるよう精神的にも鍛えられていたに違いない。

冒頭に紹介した「なぜこんなに強いのか」というメールの送付は翌日以降の阪神タイガースの連敗に影響したのだろうか。それは否定的である。そのメールを送付しなかったとしても結果は変わらない。それは二人だけの会話であるから。一方、「A.R.E.」はどうか。球団もメディアもファンも「優勝」という用語の使用を避け、「優勝」を「A.R.E.」で代替することによって、38 年ぶりのペナント優勝、シリーズ優勝へ向けて阪神タイガースの各選手が感じる緊張感を緩和させることに役立ったと言えまいか。「A.R.E.」が提唱されていず「優勝」というフレーズを周りが連呼したとしたら、選手の緊張感が増大し、例年のようにファンの期待を裏切ることになったのではないか。この意味で、「Aim, Respect, Empower」を提唱した岡田監督、そして、「A.R.E.」の略語と「あれ」と読ませ優勝の指示代名詞とした球団戦略が功を奏したといえよう[†]。

タイガースの来季のスローガンは「A.R.E. GOES ON」と決まった。もし、このまま、次のシーズンに突入すると「あれ⇔優勝」の代替効果が薄まったうえ、精神面に悪影響を及ぼす「頂上に昇りつめた選手がその地位を守る立場」が加わり、連覇は覚束ない。2 月には春季キャンプが沖縄で始まる。今年は周囲が「優勝」を叫んだとしても、堂々と実力が発揮できるよう、極限状態における精神力を鍛えられるようなキャンプ活動を期待する。

狩野 裕 大学教員・統計学者・昭和 53, 54 年度全日本卓球選手権大会奈良県代表(一般男子の部)

脚注†

「なぜこんなに強いのか」と言う、言わない、また、「A.R.E.」を提唱する、提唱しない、のように事実と仮想した反事実とを対比し、それらの結果を比較することで因果関係を論じる方法は「因果推論における反事実モデル」と言われる。本来はこのモデルにデータが伴い因果関係を論じることになり、この場合、統計的因果推論(における反事実モデル)と言われる。